

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01400

研究課題名（和文）文化遺産の「社会的ふるまい」に関する応用人類学的研究：東部アフリカを事例に

研究課題名（英文）Social Behavior of Cultural Heritage: An Applied-Anthropological Study of Heritage in Eastern Africa

研究代表者

飯田 卓 (Iida, Taku)

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・教授

研究者番号：30332191

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、個々の社会文化的コンテクストをふまえた文化遺産の参与観察と民族誌的記述、社会文化的コンテクストが異なる複数の文化遺産の比較分析、複数の社会文化的コンテクスト相互のあいだで意図的に情報を流通させる「野外実験」という3つのアプローチを提案していた。とについては、批判的遺産学会の2020年大会（ロンドン）において「アフリカの遺産におけるローカルな価値」という分科会を、スイスの研究者2名およびウガンダの研究者1名とともに企画・実施した。は感染症流行のため、じゅうぶんに実施できなかったが、代表者がマダガスカルで記録したビデオをもとに民族誌映画を制作し、複数の国際映画祭で上映した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

すでに出版したHeritage Practice in Africaでは、個々の社会文化的コンテクストをふまえた文化遺産の記述をおこなった。また、編集集中のRevisiting Nara: Authentic Change in Intangible Cultural Heritageでは、アフリカ以外の地域の事例報告もふまえ、変化していく文化遺産に関する合意を得るための必要条件を論じ、ローカルな価値観の尊重を指摘した。このことは、日本の文化財保護法（1950年）が制定されて四半世紀が経過しようとしている現在、あらためて文化遺産の価値と社会的位置づけを考えなおすうえで重要である。

研究成果の概要（英文）：The study proposed three approaches: (1) participatory observation and ethnographic description of cultural heritage based on each sociocultural contexts, (2) comparative analysis of multiple cultural heritage sites with different sociocultural contexts, and (3) “field experiments” that intentionally distribute information among multiple sociocultural contexts. The first two approaches (1) and (2) were demonstrated and discussed in a session “Local Values of Heritage in Africa” at the 2020 Congress of the Society for Critical Heritage Studies (London). This session was organized by the members as well as invited researchers from Switzerland and Uganda. Although the approach (3) could not be fully implemented due to the pandemic, an ethnographic film was produced based on a video clips which IIDA recorded in Madagascar. It was screened at several international film festivals.

<https://www.r.minpaku.ac.jp/heritage/project/en/publications.html>

研究分野：文化人類学

キーワード：世界遺産 無形文化遺産 コミュニティ 文化伝承 実践 価値 グローバル化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

文化遺産の効用は観光社会学などの分野で明らかにされてきたが、文化遺産が逆に問題の引き金となることも少なくない。そもそも文化遺産は、大多数の人びとに価値を認められたものばかりとはかぎらず、認知度が高まる過程で一部の人びとから価値を否定されることがある。その好例が、戦争遺構や災害遺構のような「負の遺産」である。百年経てば歴史的な記念碑になるとわかっているにもかかわらず、戦争や災害が起こった直後には痛ましい記憶を呼び起こさせるため、それをつつがずで残すことには強い反発が生じるのである。つまり文化遺産は、少数の人びとに価値を認められたあと次第に普及することもあるが、一部は社会的軋轢によって淘汰され、長い年月をかけて広範な支持を得るといふ、社会のなかで動的にふるまう存在だといえる。

しかも近年では、広範な支持を得るにはいたっていない「文化遺産」を積極的に評価する動きが広がっている。その背景には、政治的影響力の強いヨーロッパ地域の文化遺産が支持を得やすいという傾向がある。そうした文化遺産だけを文化遺産と考えるだけでは地域的な偏りを是正できず、「人類全体の遺産目録作り」が達成できないということがある。このためユネスコ(国際連合教育科学文化機関)は、2003年の無形文化遺産保護条約で文化遺産の要件を緩和し、「社会、集団及び場合によっては個人」に対して「同一性及び継続性の認識を与える」ものであればよいとした。本研究でとりあげる世界遺産(世界遺産リストに記載された物件と、その候補となるコモロ国内暫定リストに記載された物件)でも、周辺住民などの「コミュニティ」が遺産運営で積極的な役割をはたすよう期待されるようになったという、遺産の普遍的価値はかつてほど強調されなくなった。

文化遺産の定義が変わりつつあるこんにち、行政の実務家たちは、ふたつの困難に直面している。ひとつは、認知度が低い文化遺産の価値を定着させるよう求められることがあること、もうひとつは、見いだされた文化遺産の価値を認める人びとと認めない人びととのあいだに生じる葛藤を調整していかなくてはならないことである。これらはいっけん、学術的な課題にみえないかもしれないが、いずれも地道な学術活動を抜きにしては達成できない。第一の困難を解決するうえでは、「文化遺産とはなにか」と問いかけながら特定地域の文化的コンテクストを精査しなければならず、第二の困難を解決するうえでは、複数の文化的コンテクストをのり越えるような対話を仕掛けていかなければならない。これらの仕事は、特定の地域に身を置きながらローカルな事象の相対化をはかるといふフィールドワークや、異文化のようすを自文化の読者に伝えるという民族誌の営みになぞらえることができ、いずれも文化人類学の素養を徹底してはじめて達成できる。

2. 研究の目的

本研究では、少なくとも国内的に支持されてきた「世界文化遺産」がその価値をめぐってどのような課題を抱えており、それをめぐって国内外のさまざまなアクターがどのような働きかけをおこなっているかを、民族誌的(=ボトムアップ的)に明らかにしていく。複数のアクターの働きかけを受けて文化遺産の価値が振幅するようすを、本研究では「文化遺産の「社会的ふるまい」とみなし、記述を進めるとともに、あらたな実務モデルを構築するための実証的資料も集めていく。本研究の核心的な問いは、人びとはどのような場合に互いの文化遺産を認めあえるのか、文化遺産はどのような場合に人びとを繋ぐことができるのか、ということに尽きる。この問いに関して知見を深めることが、本研究の大きな目的である。

本研究では、上記の問いに対する答えをフィールドワークにもとづいて考究する。そもそもこうした問いが生じた背景には、文化遺産をめぐる価値の多様化という動向があり、早い時期に登録された狭義の文化遺産だけを見ているだけでは真の解決に到達できない。また、ある文化遺産が理想的に運営されているようにみえても、現実の人間関係のなかに位置づけられているかぎり、葛藤や同盟のような人間社会の動きをふまえずしては正しく理解したとはいえない。それぞれの遺産の個性を意識しながらフィールドワークをおこなうことには、そうした問題の核心に迫っていく意義がある。

このように遺産の個性をふまえた研究においては、イタリアや中国といった「世界遺産大国」よりも、世界史における文化的貢献の評価がじゅうぶん定まっておらず遺産の「社会的ふるまい」が顕著な地域のほうが対象地域に適している。本研究の対象となる東アフリカ地域では、国内の文化遺産行政システムが発展途上にあつてユネスコの重点的な支援対象地域となっており、さまざまなアクターの動きが顕著にみられる。

本研究の学術的な独自性は、文化遺産を人間の営為との関わりのなかで考えることにある。上述した無形文化遺産保護条約は、文化遺産をその担い手との関わりで定義しているため、本研究に類似した研究は少しずつ増えているが、世界遺産条約に関わってコミュニティの動きを記述・分析する研究は、世界的にみてもほとんどない。本研究は、普遍的価値を備えているとみなされやすい世界遺産の問題にとり組むため、フィールドワークという手法と東アフリカという対象を選んでおり、その点で比類をみないと自負している。

本研究の創造性は、フィールドワークという手法に加えて、比較分析や野外実験の視点をとり

入れたことにある。多くのフィールド研究では、質的資料の収集と、特定の社会文化的コンテクストにおける各資料の内的連関の分析が重視される。しかし本研究ではそれに加えて、複数の社会文化的コンテクストに置かれた複数の文化遺産のふるまいを比較するとともに、地域外の文化遺産についての意図的な情報提示がどのような効果をもたらすか観察する。このことにより、たんに文化遺産の社会的ふるまいを明らかにするだけでなく、文化遺産の価値を共有するコミュニティをあらたに創出していくというアクション・リサーチの側面ももっている。「知られざる文化遺産」の価値共有範囲を拡大していくことが求められるこんにちにおいて、同時代的課題に積極的にとり組むよう本研究は計画されている。

3. 研究の方法

本研究が対象とする東アフリカ4ヶ国(表1参照)では、文化遺産行政がかならずしも体系的に整備されておらず、それゆえに文化遺産(人びとの同一性・継続性の感覚を保証する文化的シンボル)にまつわる民間の動きが活発である。また、現行の文化遺産がヨーロッパ地域に偏在していることの対応策として、ユネスコはアフリカ地域で積極的な文化振興策を継続しており、本研究の成果が即座に応用される可能性が高い。これらの理由から、東アフリカ地域を対象地域として選択した。これらの国々は治安上のリスクも比較的少なく、日本の研究者も多い。また、バントゥ系の言語を基盤として互いに類似した文化が展開してきたため、文化比較も容易である。

表1 研究代表者・研究分担者の分担と調査地

国名	ケニア	タンザニア	ウガンダ	コモロ
分担者	鈴木・飯田	中村	梅屋	花淵
遺産名	ラム旧市街	キルワ・キシワニとソング・ムナラ	カスピのブガンダ歴代国王の墓	歴史的イスラム王国(国内リスト)
民族名	ラム島民	キルワ島民	ガンダ人	ンガジジャ島民

研究組織を表1に示した。各研究分担者は、東アフリカ地域に属するユネスコ世界文化遺産(コモロのもののみ登録審査中)のいずれかを担当して調査を進める。各研究分担者は、少なくとも10年から20年におよぶ調査経験を担当地域において有している。例外は、研究代表者である飯田で、彼はケニアでの調査経験がほとんどなく、これまでマダガスカルユネスコ無形文化遺産(ザフィマニリの木彫り知識)に関して調査研究をおこなってきた。しかしマダガスカル文化は表に示したものと異なってバントゥ系文化に属せず、他との比較が困難なため、今回はケニアでの調査を補佐するとともに、世界遺産の運営にも見直しを求めてきた無形文化遺産条約の研究者として、全体を総括することとする。

また、本研究には、ケニアで調査してきた慶田勝彦(熊本大学)が研究協力者として参加し、緊密に連携して研究成果の一部を共有する。慶田は、世界文化遺産(ミジケンダのカヤの聖なる森林群)とユネスコ無形文化遺産(カヤに関連した伝統と実践)の両方に関する調査をすでに実施しており、本研究にきわめて有益な知見を公表しつつある。

本研究は、大きく3つの方法論から成る。個々の社会文化的コンテクストをふまえた文化遺産の参与観察と民族誌的記述、社会文化的コンテクストが異なる複数の文化遺産の比較分析、複数の社会文化的コンテクスト相互のあいだで意図的に情報を流通させる「野外実験」である。以下、年度ごとの計画を述べながら、それぞれの方法について述べる。

(第1年度:それぞれの社会文化的コンテクストにおける文化遺産の位置づけの把握)

初年度において各研究者は、文化遺産を主たる問題意識としてそれぞれの調査地で資料収集を継続し、文化遺産をめぐる葛藤や同盟についての調査をおこなうとともに、それぞれの文化遺産がボトムアップ的に運営されているかどうか、されていないとすればその障害はなにかといった問題点を洗い出す(上記)。また、次年度における「野外実験」を見越して、文化遺産に関わる静止画像や動画をできるだけ多く記録する。

(第2年度:複数の社会文化的コンテクストの比較分析と相互に関する情報提示)

第2年度は、について補足的な資料を集めるほか、比較分析(上記)をおこなう。具体的には、年度初めの国内研究会で成果を共有し、各国の文化遺産制度と各遺産の概況(文化遺産の規模や歴史的経緯、文化的性格、担い手の数や範囲、担い手とそれ以外の人びとの関係など)を一覧できるようにかたちでまとめる。このうち文化的性格というのは、申請者が文化の三極モデルと呼ぶ図式(表2参照)のいずれの意味に近いかを示すものである。文化という語が表に示した3つの意味をたえず往還しながら具体的様相を変えていることをふまえ、研究対象となる文化遺産が場面に応じてどの意味で解釈されるかに注意し、定性的比較を進める。

表2 三極に位置する、互いに異なった文化の意味

主な担い手	エリート	民衆	文化企業
内容	洗練された作品	生活様式	メディアコンテンツ
起源	古典・ルネサンス期	ドイツロマン主義	フランクフルト学派
学術分野	文学・美学	文化人類学・民俗学	カルチュラルスタディーズ

第2年度の海外調査において、各研究分担者は、他の研究分担者が撮影した文化遺産についての情報を意図的に提示することをとおして、人びとが文化遺産についてどのような考えを持っているかを明らかにする(上記)。「野外実験」と表現してきたこの方法は、映像人類学の分野でエリシテーションとして実践されてきたもので、定性的な資料を得るうえでしばしば用いられる。この方法をとおして、自分の知らない文化遺産を人びとが理解するうえでの筋道や、それを自分の文化遺産に照らしあわせて理解しようとする筋道、さらにはそれによって生じる自分の文化遺産に対する態度の変化や、他の文化遺産に対してはたらきかけようとする動機付けなどを明らかにする。東アフリカの地域は、バントゥ文化がインド洋交易の影響を受けて発展してきたという共通性をもつため、さまざまな点で共感を得る可能性が高いとみられるが、もしそうだとすれば、ふだん交渉のない人びとと文化遺産の価値を共有することが可能かどうかという点に関して、重点的に資料を集めていきたい。

これらの作業を終えてから、年度末に国内研究会を再度開催して比較分析の表を完成させるとともに、野外実験の結果を共有する。

(第3年度：成果のとりまとめ)

第3年度には、研究成果をとりまとめる。「野外実験」に関しては、前年度の国内研究集会で明らかになった問題点をふまえ、再実験をおこない、より質の高い資料を得ることとする。また、対象地域のいずれかの国(交通の便がよいケニアを想定)でワークショップを開催する。これはたんに成果公開にとどまらず、文化遺産に対する認知を高めて当該地域の人びとのエンパワメントに結びつくという意味で、社会的波及効果を意図している。

なお、成果公開に関しては、上述したワークショップのほか、初年度から開始するウェブサイト構築や、学術雑誌での特集企画、広範な読者をねらった一般書籍の刊行などを計画している。さまざまなかたちの成果発信をとおして、学術的・社会的な波及効果を高めたいと考えている。

4. 研究成果

本研究では、個々の社会文化的コンテキストをふまえた文化遺産の参与観察と民族誌的記述、社会文化的コンテキストが異なる複数の文化遺産の比較分析、複数の社会文化的コンテキスト相互のあいだで意図的に情報を流通させる「野外実験」という3つのアプローチを提案していた。とについては、批判的遺産学会(Association of Critical Heritage Studies)の2020年大会(ロンドン、ただし感染症流行のためオンライン参加)において「アフリカの遺産におけるローカルな価値」という分科会を、スイスの研究者2名およびウガンダの研究者1名とともに企画・実施した。詳細については、すでに出版した *Heritage Practice in Africa* (National Museum of Ethnology, 2022) および編集集中の *Revisiting Nara: Authentic Change in Intangible Cultural Heritage* で詳しく論じた。

なお、詳しい成果報告は下記のサイトで閲覧できる。

<https://www.r.minpaku.ac.jp/heritage/project/>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計28件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 23
2. 論文標題 (書評) 伊藤詞子(編). 『生態人類学は挑む6 たえる・きざす』京都大学学術出版会, 2022年, iv+331p.	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ地域研究	6. 最初と最後の頁 293-298
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14956/asafas.23.293	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 0
2. 論文標題 アナーキズム社会の挑戦 マダガスカルのヴェズの戦術の可能性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大村敬一(編) 『「人新世」時代の文化人類学の挑戦 よみがえる対話の力』以文社	6. 最初と最後の頁 121-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓(著) / 陳亦欣(訳) / 阮云星(訳・校)	4. 巻 8
2. 論文標題 超越“无人在場的文化遺産悖論 文化遺産人類学之課題与視野(上篇)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 遺産(南方科技大学社会科学高等研究院)	6. 最初と最後の頁 3-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 飯田卓(著) / 陳亦欣(訳) / 阮云星(訳・校)	4. 巻 8
2. 論文標題 両種文化際遇处的文化遺産課題 文化遺産人類学之課題与視野(下篇)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 遺産(南方科技大学社会科学高等研究院)	6. 最初と最後の頁 25-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 花淵馨也	4. 巻 33
2. 論文標題 ディアスポラ・コモリアンヌの同郷組合活動を通じたトランスナショナルな共同体の形成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日仏社会学会年報	6. 最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓 (著) / 呉薇 (訳)	4. 巻 5
2. 論文標題 商品化与反商品化 馬達加斯加山村の无形文化遺産	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 遺産 (南方科技大学社会科学高等研究院)	6. 最初と最後の頁 208-231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 0
2. 論文標題 文化遺産と近代	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山下晋司・狩野朋子 (編) 『文化遺産と防災のレッスン レジリエントな観光のために』新曜社	6. 最初と最後の頁 20-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iida, Taku	4. 巻 0
2. 論文標題 Heritage Studies as Public Ethnology: Recent Trends and Issues Concerned with Intangible Cultural Heritage	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Wataru Iwamoto et al. (eds.) Proceedings of the IRCI Researchers Forum, Sakai: IRCI	6. 最初と最後の頁 76-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Chanthasone Inthavong、Chea Nol、NAKAMURA Koji、SATO Hiroshi、IIDA Taku	4. 巻 0
2. 論文標題 Panel Discussion	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JCIC-Heritage (ed.) Cultural Heritage and the SDGs III: Role of Cultural Heritage in Local Communities (Proceedings of JCIC-Heritage 's 28th Seminar)	6. 最初と最後の頁 32-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 鈴木英明	4. 巻 0
2. 論文標題 沿岸部スワヒリ世界の形成と展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 永原陽子 (編) 『アフリカ諸地域 ~20世紀 (岩波講座 世界歴史 18巻)』岩波書店	6. 最初と最後の頁 131-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 6
2. 論文標題 特別研究 デジタル技術時代におけるヒューマニティとコミュニティ 新型コロナウイルス感染症流行中のオンラインイベント	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 民博通信 online	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15021/00009956	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Iida, Taku	4. 巻 109
2. 論文標題 "Adaptive" Heritage: Carving as a cultural icon and a way of life for the Zafimaniry of Madagascar	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Senri Ethnological Studies (Heritage Practices of Africa)	6. 最初と最後の頁 77-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15021/00009915	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Keida, Katsuhiko	4. 巻 109
2. 論文標題 Still a Sacred Void? Cultural Heritage, Sacred Places, and Living Spaces of the Mijikenda Kaya Forests along the Kenyan Coast in East Africa	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Senri Ethnological Studies (Heritage Practices of Africa)	6. 最初と最後の頁 55-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15021/00009914	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nakamura, Ryo	4. 巻 109
2. 論文標題 Hidden Cultural Heritage: Tourism and Belief Concerning the UNESCO World Heritage of Kilwa Island on the Southern Swahili Coast in Tanzania	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Senri Ethnological Studies (Heritage Practices of Africa)	6. 最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15021/00009912	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Iida, Taku	4. 巻 109
2. 論文標題 Introduction: Heritage Practices in Africa	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Senri Ethnological Studies (Heritage Practices of Africa)	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15021/00009911	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 0
2. 論文標題 経験されざるものを知る マダガスカル漁撈民ヴェズにおける霊と呪術のリアリティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 川田牧人・白川千尋・飯田卓 (編) 『現代世界の呪術 文化人類学的探究』春風社	6. 最初と最後の頁 437-465
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 21 (2)
2. 論文標題 書評 坂野徹著 『<島>の科学者 パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』 勁草書房、2019	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 島嶼研究	6. 最初と最後の頁 179-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5995/jis.21.2.179	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 0
2. 論文標題 メディアの物質的基盤 とりわけ映像メディアに着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藤野陽平・奈良雅史・近藤祉秋 (編) 『モノとメディアの人類学 (シリーズ メディアの未来 12)』 ナカニシヤ出版	6. 最初と最後の頁 219-231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 0
2. 論文標題 国家を受け入れた社会の平等性 マダガスカル漁村の生業戦略と社会関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 寺嶋秀明 (編) 『わかる・ためる (生態人類学は挑む SESSION 2)』 京都大学学術出版会	6. 最初と最後の頁 191-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 lida, Taku	4. 巻 0
2. 論文標題 Sustainability in Developing Societies: Changes in Commodity Prices and Population over a Quarter of a Century in a Fishing Village in Southwestern Madagascar	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Toshio Meguro et al. (eds.) African Potentials' for Wildlife Conservation and Natural Resource Management: Against the Image of 'Deficiency' and Tyranny of 'Fortress,' Mankon: Langaa RPCIG	6. 最初と最後の頁 283-303
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 0
2. 論文標題 遺産化する地域料理	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 野林厚志（編集委員長）国立民族学博物館（編集協力）『世界の食文化百科事典』丸善	6. 最初と最後の頁 636-641
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iida, Taku	4. 巻 52
2. 論文標題 Cultural Transmission Against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Minpaku Anthropology Newsletter	6. 最初と最後の頁 13-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 インタヴォン、チャントソン、チア・ノル、中村浩二、佐藤寛、飯田卓	4. 巻 0
2. 論文標題 パネルディスカッション/まとめ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化遺産国際協力コンソーシアム（編）『第28回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会 文化遺産とSDGs III 地域社会における文化遺産の役割を考える 報告書』文化遺産国際協力コンソーシアム	6. 最初と最後の頁 30-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 0
2. 論文標題 技術習得と知識共有 マダガスカル漁撈民ヴェズの事例から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 杉島敬志（編）『コミュニケーション的存在論の人類学』臨川書店	6. 最初と最後の頁 304-342
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 19-1
2. 論文標題 書評「高田明. 『相互行為の人類学 「心」と「文化」が会う場所』新曜社, 2019年, 248p.」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ地域研究	6. 最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14956/asafas.19.68	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 飯田卓	4. 巻 0
2. 論文標題 前衛的文化運動としての「奄美遺産」プロジェクト、そしてそれを率いた中山清美さん	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 奄美考古学研究会(編)『中山清美と奄美 中山清美氏追悼論文集』奄美考古学会	6. 最初と最後の頁 612-612
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木英明	4. 巻 44 (4)
2. 論文標題 海域世界の鼓動に耳を澄ます 19世紀インド洋西海域世界の季節性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 591-623
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15021/00009515	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki, Hideaki	4. 巻 0
2. 論文標題 African Diaspora in Asia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 David Ludden, et al. (eds.), Oxford Research Encyclopaedia of Asian History, Oxford: Oxford University Press	6. 最初と最後の頁 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計33件(うち招待講演 11件/うち国際学会 11件)

1. 発表者名 Suzuki, Hideaki
2. 発表標題 Beads as currency but it is fragile: Glass-beads trade in the 19th Century East Africa
3. 学会等名 International Symposium "Glass Beads Changed the World: Production, Trade and Pursuit of Beauty" (March 8, 2024, National Museum of Ethnology, Suita, Japan) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 鈴木英明
2. 発表標題 感覚を手掛かりに環インド洋世界は見いだせるのか?
3. 学会等名 人間文化研究機構グローバル地域研究 環インド洋地域研究国立民族学博物館拠点 研究集会「五感のインド洋世界 モノの移動と感覚」(2024年2月8日、国立民族学博物館、吹田)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 博物館のデコロナイゼーションとアフリカナイゼーション
3. 学会等名 科研費基盤研究(B)「新啓蒙主義(ネオ・エンライトメント)と謝罪の文化 文化人類学と歴史学の共同研究」(代表者:窪田幸子)研究会(2023年12月15日、甲南大学、神戸)(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 協業、無形遺産、マテリアリティ、デコロナイゼーション 博物館をめぐる近年の話題との関わりから
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「国立民族学博物館の資料収集活動に関する研究 創設後50年のレビュー」(代表:飯田卓)第1回研究会(2023年12月10日、国立民族学博物館、吹田)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Suzuki, Hideaki
2. 発表標題 How to display the Dynamics of the 19th Century East African History? An Experiment at Minpaku (National Museum of Ethnology, Japan)
3. 学会等名 MPrint Workshop at Mombasa (December 7, 2023, Swahili Cultural Centre, Mombasa, Kenya) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 花淵馨也
2. 発表標題 贈与と他者 コモロ諸島・ムワリ島におけるSHUNGUの政治学
3. 学会等名 日本島嶼学会 2023年次横浜・伊豆大島記念大会 (2023年11月17日、オンライン発表)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 アフリカナイジング・ミュージアム 博物館はたんなる展示施設ではない
3. 学会等名 日本アフリカ学会第60回学術大会 (2023年5月14日、幕張国際研修センター、千葉)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 プレゼンス・マターズ 共在的コミュニケーションの学術的意義と文明史的意義
3. 学会等名 京都人類学研究会 (新歓講演会) (2023年4月21日、京都大学、京都) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 文明史のなかのプリコラージュ 南西諸島とマダガスカルにおける漁のいとなみ
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み」（代表者：片岡樹）研究会（2023年2月26日、国立民族学博物館、吹田）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木英明
2. 発表標題 インド洋西海域世界を発想する 生活文化から発想する歴史世界
3. 学会等名 第1回環インド洋世界研究会（2023年1月13日、東京大学のホストによるZoom開催）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 マダガスカル（アフリカ）
3. 学会等名 京都精華大学「地域研究入門」（2022年11月21日、京都精華大学、京都）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 文化人類学からみたマダガスカルのモノづくり
3. 学会等名 展示イベント企画「知られざるマダガスカルを発見・体感しよう」基調講演（2022年11月18日、京都精華大学サテライトスペース「Demachi」、京都）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 文化遺産としてのセガ・マロヤ
3. 学会等名 人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究 国立民族学博物館環インド洋地域研究拠点 (MINDOWS、代表者：三尾稔) 研究会 (2022年10月30日、国立民族学博物館、吹田)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 文化遺産国際協力における文化人類学的知見・視点の応用
3. 学会等名 日本学術会議 25期文化人類学分科会定例会議 (2022年7月11日、分科会長のホストによるオンライン開催) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯田卓、ウィリアム・D・ニツキー
2. 発表標題 関西在住アフリカ出身者と民博のあいだでの協働関係の構築
3. 学会等名 第317回民博研究懇談会 (2022年6月29日、国立民族学博物館、吹田)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 遺産観光の向こう側の人たち 文化遺産行政におけるコミュニティの関与
3. 学会等名 立教大学 観光人類学概論 (2022年6月15日、立教大学のホストによるZoom開催) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木英明
2. 発表標題 ザンジバルのもう一つのコスモポリタン 奴隷交易とシャンバ
3. 学会等名 日本アフリカ学会第59回大会 (2022年5月22日、長崎大学のホストによるZoom開催)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 博物館資料返還のエピステモロジー
3. 学会等名 第7回「生きる文化遺産」研究会 (2022年5月7日、国立民族学博物館のホストによるZoom開催)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Umeya, Kiyoshi
2. 発表標題 Local Practices around the Tombs of Buganda Kings at Kasubi
3. 学会等名 ACHS Fifth Biennial Conference 2020 (August 26, 2021, Zoom meeting from University College of London). (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Iida, Taku
2. 発表標題 Re-embedding Museum Objects into Local Communicative Networks
3. 学会等名 ACHS Fifth Biennial Conference 2020 (August 26, 2021, Zoom meeting from University College of London). (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nakamura, Ryo
2. 発表標題 Local Belief at a Hidden Heritage Site on Kilwa Island in Tanzania
3. 学会等名 ACHS Fifth Biennial Conference 2020 (August 26, 2021, Zoom meeting from University College of London). (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hanabuchi, Keiya
2. 発表標題 Historical Monument and Nostalgia of Comorian Diaspora
3. 学会等名 ACHS Fifth Biennial Conference 2020 (August 26, 2021, Zoom meeting from University College of London). (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Keida, Katsuhiko
2. 発表標題 The Sacred Kaya Forests as Mijikenda Archives along the Kenyan Coast
3. 学会等名 ACHS Fifth Biennial Conference 2020 (August 26, 2021, Zoom meeting from University College of London). (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Iida, Taku
2. 発表標題 Making Museum Objects Revive in Human Societies: An Experience of an Image-Sharing Project between Africa and East Asia
3. 学会等名 Serial Academic Webinars "Cultural Transmission against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices" (February 27, 2021, Zoom meeting from National Museum of Ethnology) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Iida, Taku
2. 発表標題 Heritage Studies as Public Ethnology / Sociology: Recent Trends and the Issues Concerned with the Intangible Cultural Heritage
3. 学会等名 The IRCI Researchers Forum “Progress and Challenges in the Research for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage” (October 29, 2021, Zoom meeting from IRCI). (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 ケアの文化遺産学にむけて
3. 学会等名 第2回「生きる文化遺産研究会」(2021年12月5日、国立民族学博物館のホストによるZoom開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 ヨーロッパからアフリカへの博物館資料返還の動き
3. 学会等名 文化遺産国際協力コンソーシアム第17回アフリカ分科会(2021年12月13日、東京文化財研究所のホストによるZoomウェビナー開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 くらしのなかの文化遺産 物質文化研究と博物館活動、そして文化継承支援を統合する試み
3. 学会等名 日本アフリカ学会第56回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 国立民族学博物館のアフリカ研究
3. 学会等名 TICAD7パートナー事業シンポジウム「日本のアフリカ研究を総覧する」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 IIDA, Taku
2. 発表標題 Communal Wellbeing among Competitive Fishermen
3. 学会等名 International Seminar by the UK-Japan Network on the Political Ecology of Coastal Societies “The Politics and Pitfalls of Maritime Governance” (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 遺産観光におけるバーチャリティ
3. 学会等名 第20回みんぱく公開講演会「アニメ『聖地』巡礼 サブカルチャー遺産の現在」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯田卓
2. 発表標題 日常生活的文化遺産化 馬達加斯加木雕商品化事例(日常生活的文化遺産化 マダガスカルの木彫り商品化を例に)
3. 学会等名 國立臺北藝術大學博班實驗室系列講座「時空移轉・文化續存」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 花淵馨也
2. 発表標題 コモロ諸島における世界遺産と分離主義
3. 学会等名 日本島嶼学会宮古島大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Iida, Taku (ed.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Osaka: National Museum of Ethnology	5. 総ページ数 225
3. 書名 Heritage Practices in Africa (Senri Ethnological Studies 109)	

1. 著者名 大村敬一	4. 発行年 2023年
2. 出版社 以文社	5. 総ページ数 443
3. 書名 大村敬一（編）『「人新世」時代の文化人類学の挑戦 よみがえる対話の力』以文社	

1. 著者名 杉島敬志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 348
3. 書名 コミュニケーション的存在論の人類学	

1. 著者名 奄美考古学研究会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 奄美考古学研究会	5. 総ページ数 616
3. 書名 中山清美と奄美 中山清美氏追悼論文集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

民族誌映画 "Sorombe: Ceremony for spirits in South-west Madagascar" (2021, 48min., 日本語版は「スルンベ：マダガスカル南西部の憑依儀礼」を制作し、Ethnografilm (April 9, 2023, Théâtre Lepic, Paris, France)、International Ethnological Film Festival, Kratovo, 2022 (October 9, 2022, Museum of Kratovo, Kratovo, Republic of North Macedonia)、日本文化人類学会第56回研究大会 (2022年6月5日、明治大学、東京)、東京ドキュメンタリー映画祭 in Osaka (2022年3月10日、シアターセブン、大阪)、東京ドキュメンタリー映画祭 (2021年12月6日、K's cinema、東京)などで上映した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	花淵 馨也 (Hanabudhi Keiya) (50323910)	北海道医療大学・看護福祉学部・教授 (30110)	
研究分担者	梅屋 潔 (Umeya Kiyoshi) (80405894)	神戸大学・国際文化学研究所・教授 (14501)	
研究分担者	中村 亮 (Nakamura Ryo) (40508868)	福岡大学・人文学部・准教授 (37111)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	鈴木 英明 (Suzuki Hideaki) (80626317)	国立民族学博物館・グローバル現象研究部・准教授 (64401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ケニア	ケニア国立博物館群			
南アフリカ	ケープタウン大学			
スイス	チューリヒ大学			
ウガンダ	ウガンダ国立博物館			